

ダークツーリズムが媒介する「非日常」と「日常」、  
 そして（その）「間」：済州4・3事件を事例として  
**The ‘Extra-Ordinary’, ‘Ordinary’ and ‘In-between’ Mediated by  
 Dark Tourism: A Case Study of Jeju April 3rd Incident**

韓 準祐

Junwoo Han

**要旨**：本稿は、ダークツーリズム研究において課題として指摘されてきたダークツーリズムの媒介性と再帰性について、観光経験の分析を通して考察することを目的とする。事例としては、ダークツーリズム研究において、特に2008年の済州4・3平和公園の開園後、度々報告されてきているものの、朝鮮半島における政治社会的文脈や韓国現代史を踏まえた考察が必ずしも十分に行われていない、済州4・3事件に関連するダークツーリズムを取り上げる。具体的には、済州4・3平和公園に訪れる韓国籍訪問者と現地ガイドを対象に、訪問動機、訪問前後の済州4・3事件に対する認識変化、済州4・3事件と朝鮮半島における分断の関係性に関する認識およびその変化を主とする反構造的インタビュー調査と参与観察を行い、その結果を分析した。本研究では、韓国籍訪問者が済州4・3事件に関連するダークツーリズムを通して、事件当時の過去（非日常）のみならず、同事件がタブー視された歴史（間）、そしてイデオロギー的対立とその継続という現在（日常）までを再帰的に考察することを明らかにした。

**キーワード**：ダークツーリズム、済州4・3事件、非日常、日常、間、再帰性

**Abstract**: This paper aims to explore the role of mediation and reflexivity of dark tourism, which has been regarded as a challenge of the studies, through an analysis of the experience of “dark tourists.” As a case study, the Jeju April 3rd Incident was selected, on which research has been especially focused since the opening of the Jeju April 3rd Peace Park in 2008. While the motives and experience of tourists have been studied, the socio-political situation of the Korean Peninsula and contemporary Korean history have not been properly considered. Semi-structure interviews and participatory observation were undertaken with Korean tourists and the local guide visiting the Jeju April 3rd Peace Park; their motives, perception of the Incident and its change, as well as the link between the division of Korea and the Incident were analyzed. Korean tourists reflexively (re)construct the “past” (extra-ordinary), “present” (ordinary), and the “in-between” (the continued taboo period) by visiting the Jeju April 3rd Peace Park.

**Keywords**: Dark tourism, Jeju April 3rd Incident, Extra-ordinary, Ordinary, In-between, Reflexivity

## 1. 韓国現代史の「闇」としての済州4・3事件

韓国現代史において朝鮮戦争（6・25戦争）に次ぐ人命被害をもたらした悲劇的な出来事として知られる済州4・3事件は、武装隊が蜂起した1948年4月3日から75年目を迎えた。同事件は、1960年代から約20年間続いた軍事政権下で、長年タブー視され、教科書には「共産主義者たちによる武装暴動」や「叛乱」という叙述が見られたが、1980年代後半の民主化運動、1990年代後半及び2000年の特別法制定・公布、2003年の報告書の発刊、2008年の特別法に基づく済州4・3平和公園の開園等を通して、ようやく「客観的」もしくは「中立的」視点から済州4・3事件を学ぶ機会が得られた。軍事政権下で、文学を通じた「間接的」接近しか許されなかったことからすれば、済州4・3平和公園・記念館や同事件に関連するその他の施設の整備によって、ダークツーリズムという形で、済州4・3事件への「直接的」接近が可能となったといえる。ただ、未だに韓国において、済州4・3の捉え方は必ずしも一致しているわけではなく、結果としての「良民虐殺」という認識が最も多く、次に「事件」という中立的な捉え方が見られる一方、その他の「暴動」「抗争」等の認識も確認できる（済州4・3平和財団、2017：89）。

済州4・3事件真相究明及び犠牲者名誉回復に関する特別法（4・3特別法）によると、済州4・3事件は「1947年3月1日を起点にして、1948年4月3日発生した騒乱および1954年9月21日まで済州道で発生した武力衝突と鎮圧過程で住民たちが犠牲になった事件」と定義されている。同事件による犠牲者数は、調査結果として発表された数より多い、約2万5千人から3万人と推定される。

本稿では、韓国を代表するダークツーリズムの目的地になっている済州4・3平和公園に訪れる韓国籍訪問者を対象にした反構造インタビュー調査を通して、観光研究、ダークツーリズム研究において指摘されていた観光経験の分析を通して、ダークツーリズムの媒介性及び再帰性について考察を行いたい。2章では、ダークツーリズム研究の課題を整理したうえで、済州4・3事件の認識とその変化、4・3特別法の制定やその後の報告書の発刊等の真相究明の過程において見られた保守・進歩の対立、済州4・3平和公園の訪問動機や観光経験に焦点を当てた研究をレビューする。3章では、研究方法および調査の詳細について記す。4章では、調査結果を回答者の属性および基本情報、4・3平和公園を訪れた韓国籍訪問者の施設見学後の4・3事件に対する認識変化、朝鮮半島における分断と当事件の関係性に関する認識とその変化の順に記述し分析を行う。5章では、観光の動機と経験等の調査結果の分析を通して、済州4・3事件に関連するダークツーリズムの媒介性及び再帰性に関する考察を行う。6章では、本論考の成果をまとめ、結論を述べる。

## 2. 先行研究のレビュー

### 2.1 ダークツーリズム研究における課題：観光経験と媒介性、再帰的考察

1996年、Foley and Lenonによって、ダークツーリズム（dark tourism）という用語が提唱されてから約25年が経った。ダークツーリズムやタナツーリズム（thana tourism）の英語で執筆された文献数を分析したLight（2017）は、ダークツーリズムという用語が提唱された1996年には増えたものの、それから2006年までの約10年間は増減を繰り返したことを指摘する。さらに、2006年以降は全体的に右肩上がりが増加傾向が著しくなったと分析し、観光研究における主流に位置づけるようになったと述べる。日本でもダークツーリズム研究は、多くの研究者によって注目され、その成果も数多く報告されている。韓国においても、ダークツーリズム研究は2000年代後半に広がりを見せ（轟、2013）、学術的領域のみならず、一般的に観光商品やアステイネーション・マーケティングにおいても使われるようになった。

Light（2017）は、従来のダークツーリズム研究成果を6つのキー・トピックに分類し、それらの議論の進展を評価する。6つのテーマは、①概念の定義と視点に関する論点、②ダークツーリズムの道徳（ethical）に関する議論、③ダークツーリズムとタナツーリズムの政治的・イデオロギー的側面、④死や苦しみに関する需要の性質・本質、⑤ダークツーリズム目的地のマネジメント、⑥ダークツーリズムの研究手法である。彼は、ダークツーリズムとタナツーリズムの今後の優先的に取り組むべき課題についても述べているが、6つのテーマのうち、とりわけ④死や苦しみに関する需要（ニーズ）の性質・本質に関する提言に、その他のテーマより多く紙面を割いている。その中に、観光客・訪問者の経験についても記述しているが、その一部を抜粋すると、既存研究で観光経験の分類（認識、感情、関係経験）が分析されているが、より広い範囲の地域で研究されるべきで、観光・見学の現場での経験をより広く研究・検証（examine）する必要があると述べている。具体的には、観光見学の前の期待と認識、その後の記憶と再帰的考察の仕方を含む実践、ダークツーリストへの長期的影響に触れており、観光経験を分析するためのダークツーリストに対するより精緻（nuanced）モデルが必要であると指摘する（Light, 2017:295）。

さらにLightは、ヨーロッパや米国、オーストラリアに偏った研究の現状を課題として指摘し、地理的観点から拡大する必要性を論じている。その中に、西洋中心的な死生観に基づく分析の枠組みではなく、その他の地域における分析視覚を用いる必要性についても触れている（ibid:296）。彼はポストモダニズムの文脈でダークツーリズムを理解する試みにおいて、Mortality Mediation Modelは、ダークツーリズムがより広い社会文化的文脈で理解されるべきで（ibid:289）、ダークツーリズムと‘死’（death）の関係性の理解に西洋的フレームワークを用いることは、非西洋におけるダークツーリストの観光経験を理解するためには適切ではないかもしれないと述べている（ibid: 296）。

Mortality Mediation Theory は、Dark tourism Consumption with a Thanatological Framework

(Stone and Sharpley, 2008) を Stone が発展させたモデルである (Stone, 2012)。Stone は、現代において、制度的に死が隔離されているがゆえに、ダークツーリズムにおける重要な他者の死の表象が、死 (mortality) を媒介し、生者 (the living) に復活された死をつなぐ重要な関係性を持つと述べる (Stone, 2012:1582)。さらに、ダークツーリズムは、一つの制度として、死の意味の構築を手助けする現代の再帰的メカニズムの範囲 (range) に加わったという認識を示し、ダークツーリズムを世俗化された、死の隔離された社会における死の新たな媒介制度 (mediation institution) として捉えている。Stone は、ダークツーリズムを、生者と死者をつなぐ物理的な場所を提供するのみならず、我々に現代の死の实在論的意味を構築する認知的空間を提供するものと述べる (Stone, 2012: 1582)。ダークツーリズムを消費しようとする動機については、死 (それ自体) を経験するのではなく、潜在的観光経験の結果としての、死に関する物語 (mortality narratives)、教育 (education)、エンターテインメント (entertainment)、記念 (memorialisation)、道徳的教育 (moral instruction)、死の象徴 (memento mori) が中心題目になると分析している (ibid)。

同理論は、観光経験そのものの分析に止まらず、現代社会を考察する上で重要な視点を提供してくれている。ダークツーリズム研究において、観光経験の理論的枠組みとして重要な研究業績として理解されている一方で、先述したようにダークツーリズムの理論的考察における同理論への偏り・集中に関する懸念も指摘されている (Light, 2017)。

日常における死の隔離とダークツーリストによる接近・消費に関する共通認識を示した Sharpley (2017) もダークツーリズムの媒介性や観光経験について次のように提言した。今後のダークツーリズム研究においては、商品としての、あるいは特別な形態の観光消費として注目するのではなく、ダークサイト・アトラクションを、ダークサイトが表象するダークイベントとその場を訪れる観光客の間の媒介 (mediators) の機能とその影響に焦点を当てる必要性があり、異なる国家や文化の文脈におけるダークツーリズムの媒介の役割を探求すること、ダークサイトにおける政治的、道徳的、そして解釈的チャレンジにまつわる特定の実践的マネジメントの探求することでダークツーリズムのトピックがアカデミックな信頼性を取り戻すことのみならず、死者 (the dead) ではなく生者 (the living) へ関心が向けられることになる」と述べている (Sharpley, 2017:182-183)。

Sharpley は、ダークツーリズムの媒介性、観光行動の分析を通して、本質的なダークツーリズムの意義に関する議論が可能となると捉えている。つまり、今を生きるダークツーリストを含む「生者」の分析、ダークツーリズムの意義を探求すべきという見方を示した。

ダークツーリズムにおける観光経験を捉える代表的な試みの一つとしては、フロイトとラカンの「死の欲動」を援用しながら、危険な地域を訪れるダークツーリストの行動やその背景等を分析した Buda の研究成果が挙げられる。Buda は、危険な地域 (conflict zone) における観光行動は、家族の記憶や古いトラウマを交渉 (negotiate) する場であり、「死の欲動」を通して、楽しさと恐怖と生と死の境界が曖昧になると分析する (Buda, 2015)。

遠藤（2016）は Buda の論考や立木、古市の議論を参考にしながら、「[「ダークツーリズム」]のもとで「非日常的な“死”や“苦しみ”」（darkness）を観光することで、実はわれわれは大事なことから目をそらし逃避してしまっている可能性もある」と述べる（遠藤、2016:20）。「日常性のもとで“死”“苦しみ”をすぐ隣りに感じつつ、「“死”“苦しみ”とともに生きる」こと、ダークツーリズム研究の今後：現代社会におけるわれわれの“生”“喜び”と“死”“苦しみ”のあり方を考える大きな視座をもって、議論を展開すべき。」（ibid:21）と続けている。つまり、遠藤は、ダークツーリズムを通して、非日常における「死」「苦しみ」のみに重点を置くことによって、日常の「死」や「苦しみ」が焦点化されず看過されることに対する危惧を示している。

他方、これまでのダークツーリズム研究において、「死」や「苦しみ」の主体は、異質な他者という捉え方、過ぎ去った「非日常」におけるものという捉え方が多かった。もちろん、民族的同一性や、家族のような関係性のある観光客に焦点を当てられた研究がなかったわけではないが、先述した Stone や Sharply の論考や、ダークネスを楽しみとして覗き見るダークツーリストの観光経験を分析した市野澤（2016）においても、想定されているダークツーリズムの対象は、あくまでも異質な「他者」、彼らの「死」や「苦しみ」であった。遠藤は、他者の苦難を理解することは困難であり、だからこそ「他者に寄り添い共生するゲーム」という舞台としてダークツーリズム（の場）を捉えようとしている（遠藤、2019）。しかし、「非日常」の「他者」の「死」や「苦しみ」が、ダークツーリストの「日常」における「死」や「苦しみ」が、「非日常」の「他者」の「死」や「苦しみ」と無関係ではない場合、そのようなダークツーリズムが存在するのであれば、具体的にどのような観光（現象）で、その際のダークツーリストの観光行動は、どのように理解されうるだろうか。

例えば、朝鮮半島における分断、その現実にも向き合うダークツーリズムにおいては、分断は、過ぎ去った「非日常」ではなく、今もなお続くものであり、それを再認識し、ダークツーリストのそれぞれの思いを再確認することになるだろう。朝鮮半島における分断を客観的に見られる外国人観光客のような立場は勿論存在する。また、韓国籍ダークツーリストにおいても、離散家族のような直接的分断による苦しみをなお抱えている人びととそうではない訪問者との観光経験の差はあるだろう。分断という現実をどのように捉えるかは韓国国民の間にも様々な見方は存在することは言うまでもないが、少なくとも韓国籍ダークツーリストにとっては、現在も続く分断を「過去」・「非日常」として捉えることは困難だろう。1950年から1953年まで続いた朝鮮戦争（6・25戦争）を対象にするダークツーリズムの場合でも、その背景にあるイデオロギー的対立と分断、その「継続」は、韓国籍ダークツーリストは再認識せざるを得ず、その場合、「過去」「非日常」における「異質な他者」の「苦しみ」というような捉え方では本質的な観光経験の分析には繋がらない可能性がある。

先述した Sharpley（2017）の提言や遠藤（2016）の指摘を踏まえると、日常における死や苦しみを捉える分析視覚、それに向き合う「生者」としての「ダークツーリスト」、（も

しくは)「我々」という視点が浮かび上がってくる。つまり、「死」や「苦しみ」を伴う、過ぎ去った「非日常」ではなく、むしろ「日常」にも「死」や「苦しさ」は混在しており、それに向き合う観光客、我々という捉え方も可能かもしれない。「非日常」「過去」に自分とは関係のない、希薄な関係性にある「誰か」「異質な他者」の死や苦しみとして、ダークツーリズム(あるいはダークツーリストの目的地)が消費されるのではなく、「現在」「日常」においても存在する(はずの)「我々」の「死」や「苦しみ」という捉え方、そのような分析視覚に基づくダークツーリズム研究も必要になるだろう。そのようなことを考察する上で、済州4・3事件、また同事件にまつわるダークツーリズムは好例であるといえる。なぜなら、イデオロギー的対立による分断とその継続(軍事政権下でのタブー視された歴史を含めて)が、済州4・3事件と真相究明の流れに影響を及ぼしたからである。次節で、済州4・3事件の認識に対する意見対立、タブー視された歴史、4・3平和公園の訪問者に焦点を当てた先行研究を概観する。

## 2.2 済州4・3事件の認識を巡る対立とその変化、済州4・3平和公園の訪問動機

済州4・3事件に関連する研究は多岐にわたるが、本稿では大きく①済州4・3事件に関する認識およびその変遷、②真相究明の段階での議論や課題、③4・3平和公園の訪問動機や行動に焦点を当てた研究等を簡略にレビューしたい。

まず、済州4・3事件に関する認識と変遷については、韓国戦争(朝鮮戦争)と済州地域社会の分析(Park, 2010)、公的認識および叙述の変遷(Park, 2007)、韓国現代史と済州4・3事件(Kang, 2003)等が挙げられるが、例えばPark(2007)は、韓国の言論報道、中等学校・高等学校の社会・国史教科書の記述変遷を詳しく分析している。

Parkによると、1948年4月3日武装隊の襲撃によって米軍政当局の公式的な反応は「暴徒たちの総選挙反対暴動」で即掃討するというものであったが、4月中旬以降、武装隊と米軍政の対立が深刻化するなか、異なる言論報道が見られるようになる。例えば、右翼系新聞の<朝鮮日報><東亜日報>は「暴動」として、左翼系新聞の<独立新聞><ウリ新聞><朝鮮中央日報>は「騒擾事件」「武装蜂起」「済州島の抗争」「済州島人民蜂起」として報じている。

1948年6月~7月には、中立的立場から捉えようとする記事の増加し、「4・3事件」という用語の一般化するが、1948年8月15日に大韓民国の政府が樹立されてからは、「解決すべき事件」から「鎮圧されるべき叛乱」として報じられる。1960年4月19日革命によって、済州4・3は、「暴動・反乱」から「事件」に還元されるが、5・16クーデターの後は、4・3の論議自体のタブー視され、国史教科書には「北韓共産党の使嗾のもと、済州島で起きた共産武装暴動」と叙述される。

1987年6月民主抗争は4・3の再認識の契機となら、学生層と市民社会から「抗争」の認識が台頭するが、保守言論・政治圏の反対も見受けられた。2000年の4・3特別法の制定、

2003年の4・3真相調査報告書の確定、盧武鉉大統領の公式謝罪という真相究明の一連の流れのなか、4・3は「事件」としての認識が広がることとなる。

彼は、社会・国史教科書の叙述内容を、1960年代から1980年代の「暴動」の支配、1990年代の「抗争」の台頭と政府認識との対立、2000年代の「事件」の制度化と分類する(表1、表2を参照)。

クーデターによって樹立された朴正熙政権と全斗煥政権、盧泰愚政権においては、済州4・3事件は、「共産主義者たちによる武装暴動」で、軍警の鎮圧作戦は正当性のあるものだったという認識が確認できる。長年の軍事政権後、ようやく誕生した文民政府・金永三政権においても「共産主義者たちが南韓の5.10総選挙を攪乱するために起こした武装暴動」という叙述が見られ、基本的な認識としては、軍事政権下の認識と大きな違いは見受けられないが、「鎮圧過程で無辜な住民たちも犠牲」という済州島民の苦しみに関する焦点を当てた記述が確認できる。このような済州島民の被害、犠牲に関する記述は、2000年代の教科書でもより具体的な記述として登場する。例えば、金星教科書では「この過程において数万の済州島民たちが一緒に犠牲となった。」と記述されている。また、大韓教科書では、「済州島で起きた武装蜂起を主導したのは数百名しかない左翼勢力だった。ところが、国軍と警察は彼らを鎮圧するのに山間マウルを全て焼きはらう焦土化作戦を実施し、この過程で無辜な住民が命をおとした。この事件は1954年に終わったが、この過程で住民たちが被った傷はいまだに癒えていない。」と記載されており、武装勢力の人数・規模は限定的であったにもかかわらず、国軍と警察は焦土化作戦を行い、無辜な済州島民の犠牲につながったこと、事件そのものは終わったが、住民の傷はまだ続いているという認識を示している。

表1 済州4・3事件と麗水・順天事件に対する教科書の叙述内容のまとめ：  
「暴動」の支配(1~4)「抗争」の台頭と政府認識との対立(5~6)

時期的教科書	叙述内容
1次教育課程 1954年～1963年	言及なし
2次教育課程 1963年～1974年	言及なし
3次教育課程 (朴正熙政権) ・1976年発行 ・文教部発行 ・国定教科書	北韓が南韓の共産主義者に使嗾し、済州島での暴動と、麗水・順天での叛乱を起こさせた。

3次教育課程 (朴正熙政権) ・1979年発行 ・国史編纂委 ・1種教科書	北韓が南韓の共産主義者に使嗾し、済州島での暴動をおこし、麗水・順天での叛乱をおこさせた。
4次教育課程 (全斗煥政権) ・1982年発行 ・国史編纂委 ・1種教科書	北韓が南韓の共産主義者に使嗾し、済州島での暴動をおこし、麗水・順天での叛乱をおこさせた。済州島の暴動事件は、北韓共産党の使嗾のもと、済州島で共産武装暴徒が蜂起し、国政を脅かし、秩序を倒した南韓狂乱作戦のなかの一つだった。共産党たちは、島民たちを扇動し、暴動をおこし、漢拏山を根拠に官公所襲撃、殺人、放火、略奪などの蛮行を犯した。しかしその後、韓国は軍警の活躍と住民の協調で平穏と秩序を取り戻した。麗水・順天叛乱事件は、済州島暴動と同様に大韓民国を混乱させるためのものだった。
5次教育課程 (盧泰愚政権) ・1990年発行 ・国史編纂委 ・1種教科書	大韓民国の政府樹立を前後にし、彼らは済州島4・3事件、麗水・順天叛乱事件等を起こした。済州島4・3事件は共産主義者たちが南韓の5.10総選挙を攪乱するために起こした武装暴動であった。彼らは漢拏山を根拠に官公所襲撃、殺人、放火、略奪などの蛮行を犯した。しかし軍警の鎮圧作戦と住民の協調で平穏と秩序を取り戻した。
6次教育課程 (金泳三政権) ・1996年発行 ・国史編纂委 ・1種教科書	共産主義者たちは5.10総選挙を前後にして単独政府樹立を反対することを口実に南韓各地で流血事態を起こした。このような状況のなかで発生した済州島4・3事件は共産主義者たちが南韓の5.10総選挙を攪乱するために起こした武装暴動で、鎮圧過程で無辜な住民たちも犠牲となり、済州島一部地域では総選挙も実施されなかった。

出典：Park, 2007:186-187, 190 に基づき筆者作成

表2 済州4・3事件と麗水・順天事件に対する教科書の叙述内容のまとめ：「事件」の制度化

教科書種類	叙述内容
金星出版社	<p>＜単独政府樹立をめぐる葛藤＞</p> <p>単独政府樹立に対し最も激しい反対闘争が起きた場所が済州島だった。1948年4月3日単独政府樹立反対と米軍の即撤収等を主張する済州島の共産主義者と一部の住民たちは武装蜂起し、島内の官公所と警察じしょを襲撃した（済州島4・3事件）。彼らは武装遊撃隊を組織し、漢拏山を根拠地とし警察および軍人たちと戦闘を続けた。その結果地域の選挙は1年を過ぎてから漸く施行された。米軍政と新たに樹立した政府は軍人と警察、右翼青年団体を動員し、遊撃隊を鎮圧した。しかしこの過程において数万の済州島民たちが一緒に犠牲となった。</p>



大韓教科書	<p>＜済州島 4・3 事件と麗水・順天 10.19 事件＞</p> <p>光復後に全ての国民は統一国家樹立を求めたが、冷戦体制が固まることでその夢は叶えられなかった。このような状況で単独政府樹立を反対する勢力と軍・警が衝突する流血事態が南韓各地で起きた。その過程で起きた代表的な事件が済州島 4・3 事件と麗水・順天 10・19 事件だった。</p> <p>1947 年、済州島で 3.1 節記念式を終えて、市街行進をする群衆に警察が発砲し、死傷者が発生した。これに住民たちは責任者の処罰を求め、ゼネストに入り抗議した。ところが、軍政当局は民心を收拾するよりは弾圧した。特に、共産主義者たちを掃討するという名分の下、数千名の一般住民たちまで投獄し、住民たちの反感を駆った。この事件は 1948 年済州島 4・3 事件が起きるうえで大きな影響を与えた。済州島で起きた武装蜂起を主導したのは数百名しかない左翼勢力だった。ところが、国軍と警察は彼らを鎮圧するのに山間マウルを全て焼きはらう焦土化作成を実施し、この過程で無辜な住民が命をおとした。この事件は 1954 年に終わったが、この過程で住民たちが被った傷はいまだに癒えていない。</p>
-------	---

出典：Park, 2007:192-194 に基づき筆者作成

次に、真相究明の流れにおける議論、対立等については、真相と政府報告書の限界 (Hur, 2004)、済州特別法制定過程における 4・3 委員会と保守勢力間の対立 (Yang, 2014) 等がある。Yang によると、保守勢力は、済州 4・3 事件の真相究明のための特別法の制定から、真相調査報告書の確定、ノムヒョン大統領の謝罪、平和祈念館開館（平和公園の開園）に至るまで反発を続けた。

例えば、1999 年 12 月 16 日に 11 個条項で調整された 4・3 特別法案が国会本会議で上程された際に、当時の野党・金ヨンガブ議員は、“この法案が大韓民国の歴史性と正統性を否定する法”と制定に反対したが、それに対し、国会議長・朴ジュンギ氏は与野の合意があったと票決なしに可決を宣言し、翌年 2000 年 1 月 12 日に法律第 6117 号として制定公布された。

2000 年 4 月に自由民主民族会議・李チヨルスン代表等保守 15 名は、“4・3 特別法が憲法を違反した”と憲法裁判所に請求することで開始し、同年 5 月には軍将星出身の集まりである星友会の会員 333 名が同じ理由で憲法訴願を提起した。また、報告書に基づくノムヒョン大統領の謝罪直後には、自称「済州 4・3 事件歪曲を正すための対策委員会」を結成し、報告書内容の修正を要求した。同年 7 月には、‘自由市民連帯’等の 4・3 の保守団体、憲法裁判所に 4・3 真相調査報告書とそれに伴う大統領謝罪を取り消すべきという要旨の憲法

訴願を提起した。その際彼らは、4・3特別法には根本的な誤りがあり、真相報告書が大韓民国の正統性を毀損しており、このため幸福追求権、良心の自由、財産権などに侵害をうけていると主張したが、結果は却下された。

2008年には、『済州4・3事件真相調査報告書』の廃棄、4・3平和記念館開館中止、4・3委員会の統廃合、4・3犠牲者決定の無効化、『済州4・3事件真相調査報告書』の廃棄を要求したが、『済州4・3事件真相調査報告書』は、‘法廷報告書’のため修正は不可能とされた。「済州4・3事件歪曲を正すための対策委員会」と在郷軍人会、‘大韓民国国家正統性回復国民協議会’が前面に出て2008年の平和記念館の開館に対する反発した。韓スンス国務総理・対策会議、済州特別自治都知事と在郷軍人会との会同行われ、翌年2008年3月28日平和祈念館は開館する。その後も、例えば同年6月には、国防部が教育科学技術部に教科書修正意見を提出し、済州4・3を‘左翼暴動’と記述することを要求したことが波紋を呼ぶ。同年11月には、ハンナラ党の一部議員による4・3委員会廃止を目的にした特別法改訂作業の着手したことを受けて、済州島における組織的反対運動が見られる。例えば、同年12月に済州島内49市民社会団体‘ハンナラ党済州4・3特別法改定案反対島民対策委員会’が発足した。2009年には、2008年9月10月に表明された新政権の4・3の捉え方に失望した保守陣営が2件の憲法訴願、2件の国家訴訟、2件の行政訴訟を行ったが、全て敗訴という結果となった。

Park (2007) や Yang (2014) の論考を参考にしながら記述したように、済州4・3事件に対する認識や、特別法の制定、平和公園の開園までの流れのなかでも進歩と保守陣営の意見対立・衝突が続いた。タブー視されてきた歴史、その後民主化運動のなかの認識変化の動きと政府の認識との対立、その後の真相究明まで、一連の流れを含めて、済州4・3事件について韓国国民はどのように認識されているだろうか。済州4・3平和公園・記念館を訪問する人々はどのような目的で、また観光行動を通して同事件に関する認識は変化するだろうか。韓国における政治社会的状況下で済州4・3関連ダークツーリズムの動機のみならず、観光経験についても分析する必要がある。

最後に、済州4・3平和公園および訪問者に焦点を当てた先行研究を概観する。済州4・3事件にまつわるダークツーリズム研究も、真相究明、そして観光資源化の流れに伴って増えてきた。具体的には、済州4・3平和公園の開園(2008年)に伴い、訪問者の動機や経験に焦点を当てる研究も見られるようになった。

例えば、Kang and Lee (2011) は、訪問者を対象にした調査の結果、主な訪問動機を「済州4・3事件について学びたい」、「韓国人として済州島民として済州4・3事件について理解を深める義務を感じる」、「コミュニティや学校等の教育プログラムに参加する」であることを提示する。一方、学習・教育的目的は、ヘリテージツーリズムにも見られる動機であるため、ダークツーリズムとしての特徴的な動機としては、義務や個人的な介入、好奇心に注目するような記述も見受けられる (Kang and Lee, 201:559)。

Jang and Choi (2011) は、済州 4・3 平和公園の訪問客を対象にアンケート調査を行い、訪問動機を、歴史認識、日常脱出、親睦、4・3 連結、場所の魅力の 5 つを抽出している。さらに、動機要因を基準にクラスター分析を実施し、歴史価値追求集団と多目的追求集団に分類した。歴史的価値追求集団は、過去の歴史の現場の体験、記念を動機とする特徴があり、多少進歩的な性向が見られる若年層が多い傾向があり、教育的動機も強いと分析している。多目的追求集団は、好奇心、新しい対象に対する体験、家族や知人との親睦、観光の慰乐的要素等を複合的に考慮する特徴がある。歴史的価値追求集団が多目的追求集団より罪悪（感）を感じていること、それが公園訪問にも影響していると分析する。済州 4・3 事件に関連する罪悪感とは、直接的な加害者というより同時代を生きる人としての心情的な感情として分析している。

Kang らは、同じく済州 4・3 平和公園の訪問客の動機をアンケートとインタビューで調査したが、学習と義務、社会的理由と好奇心、必須教育プログラムの 3 つを主な動機として抽出している。また、訪問動機として学習と義務を選択した観光客は、より現代韓国の歴史のなかのイデオロギー的対立に関心を寄せると分析している (Kang et al. 2012:261)。

上記の先行研究は、済州 4・3 事件関連ダークツーリズムを理解する上で、とりわけ訪問・観光の動機を解明する試みとして基礎的理解を促すものとして評価できる一方、分析視覚および考察において、朝鮮半島における政治社会的変遷と合わせて十分に議論・考察されていないということも事実である。Jang and Choi (2011) も、今後の研究としては、平和公園の観覧・訪問後、公園プログラムが訪問客の認識変化にどのような影響を及ぼしたかに関する研究が必要であると述べているが、その訪問者の認識変化を考察するためには、韓国史を振り返る作業と同時に韓国籍訪問者の歴史認識の考察が必要不可欠となる。

### 3. 研究方法

本研究では、主に 2018 年 12 月 26 日から同月 31 日までの 6 日間、済州 4・3 平和公園内にある記念館に訪れた韓国籍訪問者を対象に参与観察と半構造的インタビュー調査を行った結果を分析した。参与観察に関しては、展示施設を見学している見学者の様子を観察し、記念館内に展示されていた資料や見学後の感想を書いた用紙等を記録した。

韓国籍訪問者を対象にした反構造的インタビューの質問は、人口統計学的事項、済州島訪問動機およびイメージ、旅行者の情報収集、済州島と済州 4・3 事件、ダークツーリズム関連事項が主であった。まず人口統計学的事項としては、年齢、性別、居住地域、済州島の訪問回数、次に済州島訪問動機およびイメージとしては、旅行前の済州島のイメージ、訪問理由、最も印象的だった訪問地を質問した。また、旅行者の情報収集に関連する事項としては、計画段階での情報収集手段、旅行日程、必ず訪問したい（体験したい）と思った場所やアクティビティ、済州島到着後の追加情報収集を確認した。さらに、済州島と済州 4・

3 事件関連事項としては、済州島訪問前に 4・3 事件について知っていたか、済州 4・3 平和記念館（済州 4・3 平和公園）の訪問回数、訪問目的と感想、他の済州 4・3 事件関連施設の訪問有無、済州 4・3 事件に関する認識が訪問前後に変化したか、変化したならどのように変わったかを質問した。最後に、ダークツーリズム関連事項としては、普段の生活で‘死’について考えたことがあるのか、済州 4・3 事件関連施設の見学後、‘死’についてどのように考えているか、普段朝鮮半島における南北分断について考えたことがあるか、南北分断に関する考えが済州 4・3 事件関連施設の見学後変化したかとその詳細について、4・3 事件関連施設を見学後、日常に戻った際、どのような変化があると思うかを質問した。ただ、すべての項目を質問できなかったケースもあったが、人口統計学的事項、済州島と済州 4・3 事件関連事項、ダークツーリズム関連事項についてはすべての対象者に質問し回答を得た。次章以降詳しく述べるが分析においては、主に見学前後の済州 4・3 事件に関する認識変化、朝鮮半島における分断に関する認識（変化）に焦点を当てた。インタビュー時間は、回答者によって異なるが、5分から15分の間でのインタビュー調査が大半を占めた。

## 4. 調査結果

### 4.1 回答者の属性及び済州 4・3 平和公園の来訪関連情報

インタビュー調査には、男性 22 名、女性 15 名、合計 37 名が回答に応じた。年代別にみると、20 代が 9 名で最も多く、次に 40 代、50 代、60 代が 7 名ずつ、30 代が 4 名、10 代が 2 名、70 代以上が 1 名だった。回答者の特徴としては、教育・研究関係者が 6 名で約 16% を占めたことに加え、見学者という立場とは異なって、現地のガイドとして観光客の案内を行っていた 30 代男性 1 名の回答も分析に含めた。

表 3 インタビュー回答者の属性

年代	性別	
	男性	女性
10 代	1	1
20 代	4	5
30 代	4	0
40 代	4	3
50 代	4	3
60 代	4	3
70 代以上	1	0

済州島の訪問回数は、2 回以上のリピーターが 35 名、初めての訪問が 2 名だったのに対し、済州 4・3 平和公園への訪問回数は、31 名が初めての訪問、6 名が 2 回以上と回答しており、

済州島には複数回回答している一方、済州4・3平和公園には大半が初めての訪問であった。

#### 4.2 済州4・3平和公園（記念館）の訪問動機

訪問動機については、済州4・3事件について真相を知りたいという回答が年代問わず、大半を占め、韓国人としての当事件について知ることが義務のように感じるという声もあった。これらは先行研究で指摘された訪問動機と一致する内容だった<sup>1)</sup>。

前章2節で詳しく記述したように、同事件がタブー視された韓国史や認識をめぐる対立を踏まえると、学習や理解を深めた反応・動機はごく自然な反応・目的のように思える。Park (2007) が分析したようにメディアにおいても、歴史教育においても、軍事政権下での規制は厳しく、「共産主義者たちによる叛乱」等という記述が長く続き、内容が増えたとしても1990年代半ばまで基本的な見方は変わることがなかった。そのような状況下で、一方的な視点からの叙述に基づく学習を強いられた世代にとって、また文学等を通して「間接的」接近しか許されなかった時代を経験した世代にとっては、平和公園への訪問を通して、自ら真相を確かめたい、また理解を深めたいという願望は理解できる。

実際、50代以上の回答者は教育課程で学んだ記憶がないという回答が殆どだった。また、ある60代は「学校で教わったと思うけど、私たちは共産暴動として学んだ」というふうに教わったとおぼろげに記憶している人もいた。他方、中高年層においては、教育課程以外に、小説、大学での学生運動、済州島出身の知人との交流等を通して知ったという回答も複数見受けられた。

40代の回答者からも、教育課程で学んだ記憶がないという回答が大半を占める一方、ほんやり学んだ記憶があると答えた人もいた。30代の回答者からも、済州4・3事件について知った契機として、インターネットやメディアを挙げる声が多かったことから、教育課程での学習に関する記憶が曖昧になっている可能性がある。

20代の回答者は、教育課程で済州4・3事件について学んだことを記憶していて、公務員試験を準備する過程でさらに勉強したという回答、加えて、当事件に関連するドキュメンタリーや企画展等の視聴・見学の経験があるという回答も見られた。10代の回答者については、2名とも中学校での学習したことを明確に覚えていた。

40代以上の中高年層と、20代以下の若年層の回答からは、教育課程での学習状況の差が確認できる。中高年層は、軍事政権下で済州4・3に関する議論そのものがタブー視されていたことを経験している世代である一方、若年層にとっては、真相究明のための特別法の制定後、より中立的な立場で、済州4・3事件を教育課程でも学ぶ機会を得ているといえる。

メディアに関しても、済州4・3事件の被害者の追悼記念式に文在寅前大統領が出席したことが大きく報じられたことを含め、済州4・3事件に関する注目度は高まったことは確かであり、その影響もインタビュー調査からも確認できた。さらに、メディアによっても政治的スタンスが異なり、報道内容及び視点も異なることから、自分の目で確かめたいとい

う訪問目的を語った人もいた。

#### 4.3 見学後の済州4・3事件に関する認識変化

インタビュー回答者の多くは、まず4・3事件の被害の規模、その悲惨さに驚きを示した。見学前に済州4・3事件について知っていたと語った訪問者にとっても、記念館の展示を見て、はじめて詳細が理解できたと同時に衝撃を受けたという声が多かった。以下、事例は年代、性別、出身地、平和公園への訪問回数、備考、質疑内容の順に記している（括弧内の記述及び下線は筆者によるものである）。

事例① 20代男性、済州島以外、初訪問、海外留学途中に兵役のために帰国・兵役中（休暇中）、国際政治、国際関係を勉強中

質問者：（済州4・3事件に関する）認識は変わりましたか。

回答者：うん、実際、まずは詳細まで知ることができました。見学前は漠然と虐殺があった、済州島民の何分の一が犠牲になった、このようなことしか知らなかったのですが、来てみてこれ（済州4・3事件）がなぜ済州島の一般の人々の記憶の奥に深く根付いているのか、より詳細まで6名が警察の発泡によってそれに対して市民たちが事後の対応を求めて米軍がそれを暴徒と規定し、事件に対してより深く仔細に知ることができました。

事例② 30代男性、済州島以外、初訪問、大学教員

質問者：（平和公園への）訪問前後の認識は変わりましたか。

回答者：かなり変わりました。認識としては、まず（被害の）規模で、私たちが知っていた（被害の）規模と、以前知っていた規模とは明確に異なること、つまり、大半の民間人たちは直接的に参与しなかったにも関わらず、あちこちの抑圧に耐え切れず賛同せざるを得なかったし、そこで犠牲が多く発生したこと、そのことにとっても驚きました。私は自分なりに南労党（南朝鮮労働党）や西北青年団（右翼団体）の規模がかなり大きかったと理解していたのですが、そうではなかったこと、不憫に感じます。

同時に、済州に対する認識も理解も足りなかったことを反省する声、教育のためにもより多くの韓国人訪問者がいてしかるべきという意見や、教育観光で目的地として設定すべき等の声が確認できた。

事例③ 60代女性、済州島以外、初訪問

質問者：見学後、4・3事件に関する認識は変わりましたか。

回答者：あまりにも悲惨で、私たちが自分や家族が犠牲になったわけではないけれども、同じ民族じゃないですか。（済州）島に住む人々の苦痛をその時代、陸地では知りません（でした）。避難する場所も陸地なら逃げることもできるけど、ここは避難も難しく、苦しさが感じられます。

事例④ 60代男性、済州島以外、再訪問、大学教員

質問者：済州4・3事件に対する認識の変化がありましたか。

回答者：認識が変わったというかは、昔私が大学生の時、私たちが初めて4・3について知るきっかけになった小説があります。玄基築作家といって、その時はおそらく間接的に初めて韓国人に知られた小説です。その小説を読んですごく泣きましたが、それでも残酷な（内容を含む）小説だったにも関わらず、私たちが正確に残酷さを知ることはなかったけれども、しかし今回見学してみると途轍もなく残酷だと。本当に間違ったことを沢山したんだ、昔の軍人たちや、特に米軍も、このようなことが、ともかく幸いに民主政府がはいって（民主政権になって）このようなことが知られるようになって、このように過去に間違っただけで、教科書で知らされたことが多かったです。正す（改める）このような変化の意志がここの博物館（記念館）がそのような役割を果たすと思います。そのように考えます。若い人々が幼い時期からきて、このような教育の場所になるということです。このような過去を韓国社会で再度起きないように……

別の60代男性（済州島以外、初訪問）も、彼の見学前後の認識は変わらないと答えたが、若年層の済州4・3事件に対する認識が不十分で歪曲されているように思えて、息子夫婦を連れてきたと訪問動機を語り、平和公園を修学旅行の必須コースに入れる方法を考えてほしいとも語った。彼の回答からは、平和公園の見学によって、済州4・3事件に関する認識変化は見られる可能性が高いという見方が垣間見られる。実際、若年層ではないが、彼の期待するような認識変化が見られるケースがあった。

例えば、40代女性（済州島以外、初訪問）は、済州4・3事件に関する認識が訪問前後、大きく変化したと語った。彼女は、団体旅行で済州島を訪問したが、最初は、なぜ旅程に平和公園・記念館が入っていて、なぜ訪問しなきゃならないかと疑問に思ったが、発生原因、進行、結末を見てからは衝撃を受けたと答えた。彼女のように見学前に平和公園への訪問を懐疑的に捉える背景には、次の回答からも確認できるように朝鮮半島におけるイデオロギー的対立と、その政治的利用を考える必要がある。

事例⑤ 60代女性、済州島以外、初訪問

質問者：見学後、4・3事件に関する認識は変わりましたか。

回答者：正しく事実を知る前には、政府が話すことがすべてではないと思ってはいたが、メディアを通じて大体は聞いていたけれど、現在進行だと思う。理念的に私たちは幼い頃、反共（反共産主義）教育を受けた世代だから、‘パルゲンイ’（共産主義者）は悪く、南韓政府（大韓民国の政府）民主主義は良いと考えたけれども、年を重ねてきて、認識が、左、右ではなく、民族主義的な考えが強まりましたね。

事例⑥ 50代女性、出身は済州島以外だが3か月前に済州島に移住、再訪問、元教師

質問者：訪問前後、（済州4・3事件に関する）認識変化はどの程度見られますか。

回答者：はい、とても変わりました。だから、なんと言えばよいのか。これが公権力によって起きた事件ですが、私たちが最初歴史的な部分だけを学んだ時、文字で教わった時にはよく言われるような左翼によって起きた出来事で、軍人たちによってなんと言えばよいのか、そうなったとされていましたが、実質的に生きていくなかで、‘色論者’（イデオロギー対立を政治的に利用する人々）があまりにも多く、その自分たちの政権維持のために利用されてきたという、生活と少し別の問題として扱うべきではないか。今もこのような発言をすると、保守側からそのように捉えられることもあるかもしれないけど、実質的に生きる中で理念が占める割合は多いけれど、生存と問題が絡まると、少し別の観点から見なくてはならないですか。現時点ではそのように考えます。

他方で、メディアの報道が、政治的スタンスの違いから偏っている現状とそれを踏まえた上で、訪問・見学経験の価値に関する言及も見られた。

事例⑥ 50代女性、出身は済州島以外だが3か月前に済州島に移住、再訪問、元教師

質問者：最近のニュースが偏る傾向があるように思いますが。

回答者：そうです。私は、朝鮮日報をハンギョレ新聞と一緒にとっています。しかし、論調が、あまりにも異なるんです。子供が大学受験の時、論述を受ける必要があるので、朝鮮日報を読む人はこうで、ハンギョレ新聞を読む人はまたそっちで、今もJTBC ソンシヨクヒが担当するニュースと地上波ニュースとあまりにも差があって、そしてYOUTUBEで流れるニュースを信じるしかない人たちも確かにいるんです。もちろん、信じない人たちも多いですが……

事例⑦ 40代男性、済州島以外、再訪問

質問者：4・3についてメディアで接してから、見学後に認識変化はありましたか。

回答者：メディアは実際少し偏るじゃないですか。ある一方で扱う時は右翼的に流れる可能性もあって、別の方で扱う時は少し左側に流れることもあるし、そのようなこ



とを正立するためにもここに来て真実をもう少し……実際、メディアではそんなに深く扱わないじゃないですか。思想とか、そのようなことだけにフォーカスしているの、実質的に済州島民が感じる4・3を来てみて感じて学びたかったわけです。

上記のインタビュー内容からは、済州4・3事件の認識を巡る対立とその背景、そしてメディアによる報道の差異に関する回答者の捉え方が垣間見られる。しかし、次のように、記念館の展示を鵜呑みにしないという回答も見られた。

#### 事例⑧ 50代男性、済州島以外、初訪問

質問者：見学後、4・3に対する認識は変わりましたか。

回答者：特に変わっていません。ただ、その、私は4・3について（保守と進歩の）両側から見るので、説明があるけど、出典がないものについては信じられないし、勿体ないと思います。ここにいる資料、展示、すべてを認めるわけではないです。

彼の回答からは、保守や進歩の両側から、より‘客観的’に事件について理解を深めたいがゆえに、資料の出典、一次資料がないものは信じないという姿勢が見られた。記念館の展示が、済州4・3事件真相調査報告書に基づいていることを踏まえると、彼は報告書についても少し懐疑的な視点で捉えているかもしれない。しかし、先ほどの朝鮮半島におけるイデオロギー的対立とその継続、メディアによる報道の差異等を踏まえると、彼の反応それほど違和感があるものではないかもしれない。

#### 4.4 済州4・3事件と南北分断に関する認識および見学後の変化

次に済州4・3事件と朝鮮半島における南北分断に関する認識の変化に関する回答をまとめる。済州4・3事件と南北分断の関係性は、1948年の韓国政府樹立後、麗水・順天事件も含めて、韓国政府・国の威信をかけて、正当性を守るために、制圧されるべき反乱のような捉え方が強まったことで、犠牲者が集中する焦土化作戦（時期）に繋がった。このことを踏まえると「史実」として南北分断（およびそれぞれの政府樹立）によって、済州4・3事件の犠牲者が増加したことは間違った（偏った）見方にはならないだろう。しかし、回答者によっては、かなり異なる見解が示され、「関係性がない」という答えから、回答を避けようとするケースも見受けられた。まずは、済州4・3事件と南北分断の関係性を認める発言が確認できた20代の回答をまとめた上で、その理由についても考察したい。

#### 事例⑨ 20代女性2名、済州島以外、両名とも教育関連仕事に従事、初訪問

質問者：普段、（南北）分断について考えますか。

回答者A：分断、私たちの世代は大きく直接的な影響はなかった時代じゃないですか。ところが歴史書や国史本（歴史教科書）を通じて単純に伝わった（教わった）ことだからそれほど深くまでは考えたことはなかったと思います。

回答者B：私も、その、歴史本（教科書）で学んだこと、そうなのですが、幼い頃からここは、分断、戦争が可能（現実的）なところだから（有事の可能性のある場所だから）、またメディアを通して、ニュースを通じて北朝鮮の挑発があると、幼い時はただ怖かったこと、そんな感じです。

（中略）

質問者：4・3記念館を見て、南北分断に関する考えが変わったりはしていませんか。

回答者A・B：はい。

回答者B：しかし、済州4・3事件がとても悲劇的だということ、悲劇的な事件であることは考えていたけれどもここに来て（改めて）気づくことはありました。思想、イデオロギー、分断になったこと、そんな背景もあったんだなど、そのような程度。

回答者A：そうですね。私はここに来て知りました。これが（済州4・3事件が）南北分断と関連があることを全く知らなかったんですが、あ、この事件によって影響があったんだなというふうに考えましたが、それが大きく心に響いたということではなかったと思います。

実際、先述したように「史実」からすると、また報告書にも明確に記載され、記念館の展示でも確認できるように、済州4・3事件が分断に影響したとよりかは、分断及び両政府の樹立（1948年）によって、当時の韓国政府からすると正当性をかけて制圧するなかで被害が拡大したため、分断（両政府の樹立）が済州4・3事件に影響を及ぼしたという認識が正しいと思われるが、回答者は単純に言い間違えたかもしれない。しかし、済州4・3事件と南北分断の関係性を認識しながらも、それが何か彼女のなかに大きな影響を与えたわけではないと語っている。後に考察するが、若年層にとっての南北分断が彼女たちのインタビューでも確認できるように、現在もなお続くものであることは認知しているものの、どこかで分断となると直接的に身近に感じるができない部分もあると思われる。次のインタビューも同じく20代で南北分断と済州4・3事件の関係を認識している点は共通しているが、兵役中であることや大学での専攻が国際政治分野であることから、若干捉え方の違いが見受けられる。

事例① 20代男性、済州島以外、初訪問、海外留学途中に兵役のために帰国・兵役中（休暇中）、国際政治、国際関係を勉強中

質問者：見学後、南北分断や統一に対する考え方が変わりましたか。

回答者：うん、この事件の背景が先に話したように、この事件が一つに断絶されているわけではなく、理念（イデオロギー）によって民族の分裂と葛藤が、6・25（朝鮮戦争）まで、そして今までずっと繋がっていると思っていて、大きな枠組みで理念的対立を解消するため、南北が政治を離れて解消するのに協力できるのではないか。治癒の過程にはそのように考えました。これをそのまま放置すれば葛藤の歴史として残るだけだけど、振り返ってみれば互いに責任があって、そしてどちらかだけに責任があるわけでもなく、そのようなことを認知しながら、互いに治癒していけるようなきっかけになることを願っています。

濟州4・3事件の背景と同事件と南北分断の関係性に関する彼の意見は、別の回答者の見方と共通する。

事例⑩ 60代男性、出身は濟州島以外だが2年前に濟州島に移住、再訪問

質問者：普段、南北分断について考えたりしますか。見学後、その考えに変化が見られましたか。

回答者：考えますが、変わってはいません。ただ、この4・3の原因の一つに含まれ、それ以降、(事件が)終わっても、今まで分断は続いているので。

20代の別の回答者からは、南北関係改善の希望と同時に歴史認識の難しさに示す回答も見られた。

事例⑪ 20代女性、濟州島以外、初訪問

質問者：南北分断に対する考えがここを訪問して大きく変わりましたか。

回答者：うん、あまりにも若干理念的対立であまりにも極限まで行ってしまったように思えて……はい、若干……統一して早く平和が訪れ、このような事件に対する認識も正しく大きく変わってほしいですし、若い人々はそう思うけど、年配の方々は、無条件にパルゲンイ（共産主義者）、そのように大体捉えることが多いので……うん、統一できてそのような歴史に対する認識が変わったら良いと思います。

南北分断と濟州4・3事件の関係性については20代の回答者4名のうち、3名がその関係に理解を示し、濟州4・3事件について客観的に、中立的に受け止めようとしているような印象を受けた。他方で、主に50代以上の回答者のなかには、南北分断と濟州4・3事件の関係性や、南北分断に関する質問に敏感に反応する人が多く、「史実」としての先ほどの記述したようなことを、理解しているかどうかについても明確に確認できないケースも少なくなかった。

## 事例⑫ 50代男性、済州島以外、初訪問

質問者：見学後の済州4・3事件に関する認識は変わりましたか。

回答者：具体的に実像が良く理解できました。展開過程において、特に中山間地域の焦土化過程でとてつもない犠牲、漠然と理解していたことを実感できました。

(中略)

質問者：普段、南北分断について考えますか。見学後、その考えに変化が見られますか。

回答者：とても多いです。関心、(しかし)これ(済州4・3事件)と直接的に南北関係が繋がるとは思いません。

彼は済州4・3事件において最も犠牲者が出た焦土化作戦に言及しながら、その実像を詳しく理解できたと回答しながらも、韓国政府の正当性の確立のための焦土化作戦という背景とその結果としての犠牲の拡大という点には理解を示さなかった。全体的に質問として「南北分断」と「済州4・3事件」の関連性を明確に聞くことをあえて避けたことにより、南北分断に関する意識そのものを回答しないとイケないような受け止め方をした回答者もいるかもしれない。実際、唯一の70代以上の回答者は次のように回答した。

## 事例⑬ 70代以上男性、済州島以外、初訪問

質問者：普段、南北分断について考えますか。見学後、その考えが変わりましたか。

回答者：思想に関しては、あだこうだ固執する人(に対して)、私は幼い頃から見ようとしません(向き合おうとしません)。純粋に思想を語るのは良いけど、殺したり、謀略したりするのは良くない。(中略)以前から統一できたら良いが、政権、政治家たちが手段方法問わずに、だから統一できない。統一できなくても百姓たちが行き来できれば、自由に選択して南韓、北韓に住みたければ住んで交流できれば、国民が皆知って反省し未来に向けて、学生たちも連れてきて見てもらって反省できれば(後略)

彼は、朝鮮戦争中の仁川上陸作戦後、李承晩政権下で、麗水・順天事件(彼は麗順叛乱と呼んでいた)、居昌等の全国各地で虐殺が行われたと語り、政権を握れば‘バルゲンイ’(共産主義者)と謀略した歴史についても触れている。また、彼は回答者のなかでは最高齢の81歳ということもあり、自らも最も苦しい時期を過ごした世代で、植民地統治、6・25戦争(朝鮮戦争)等をすべて経験したことも言及していた。

インタビューの際、南北分断に関する質問をする前までは特に問題なく協力的だったが、南北分断に関する質問をした際に、質問の意図や質問者の所属等を改めて確認する場面があった。彼は自らも語っているように、今まで歩んだ彼の人生のなかで、イデオロギーの対立によって多くの命が犠牲となってきたことを経験していることもあり、南北分断に関

する質問にはかなり敏感に反応したと思われる。

全体的に済州4・3事件と南北関係に関する質問に対しては、その他の質問より回答があまり得られず個人差が大きかったように思える。ただ、全体的には若年層の20代の回答者は、「史実」として二つの関係性を捉えようとしている傾向が見受けられる一方、中高年層においては、南北関係に関する質問に対して警戒するような様子と短絡的な回答のみに終わるケースが見られた。

## 5. 考察

### 5.1 タブー視された済州4・3事件に接近する方法としてのダークツーリズム

済州4・3平和公園（記念館）の訪問目的としては、世代を問わず、真相を自らの目で確かめたい、学びたいという理由が多く見受けられた。平和公園を訪れる観光客の訪問動機と観光経験に焦点を当てた先行研究においては、政治社会的状況を訪問動機と観光経験に結び付け十分に考察することはなかった。しかし、教科書に済州4・3事件に関する叙述がなかった時代から、軍事政権下、またその後、1990年代半ばにおいても「共産主義者たちによる叛乱、暴動」のような教科書の叙述に基づく教育を受けていて、小説のような文学作品や個人的な繋がりでしか済州4・3事件に「間接的」接近できなかった中高年層においては、自ら真相を確かめたいという願望による「直接的」接近（平和公園への訪問）は決して理解できないことではない。ダークツーリズムがStone等による理解として、近代において遠ざかっている死を、ダークツーリズムという非日常で経験するという考え方とは異なる解釈が必要だが、遠ざかったもの、抑圧されたものに対する接近・消費という観点に立てば、教育課程での学習が許されず、約半世紀タブー視されたことを踏まえると、とりわけ中高年層において済州4・3事件の真相を確かめたいという願望は、平和公園の訪問動機・目的の重要な要因になっていると解釈できる。

また、4・3特別法の制定や報告書の発行、平和公園の開園、追悼式典の大統領参加、祝日指定等に済州4・3事件に関連するメディアでの報道回数が増加すると同時に、多様なメディアの出現とメディアによる報道の差異がより顕著になってきたことが、韓国籍ツーリストの済州4・3平和公園の訪問動機に少なからず影響を及ぼしていることが確認できた。

### 5.2 イデオロギー的対立・言説から自由になれない「生者」（としての韓国籍訪問者）

前章で記念館の見学前後の済州4・3事件に対する認識変化についてはインタビュー結果を記したが、基本的には済州4・3事件について理解が深まったこと、その被害の大きさ、悲惨さに衝撃を受けたこと、また同じような悲劇が起きないように教育の場としても活用してもらいたいという声が多数を占めたことを確認した。ところが、次のインタビュー内容で確認できるように、済州4・3事件について理解することは決して容易ではなく、平和

公園の訪問を通して若年層が十分に理解を深められるかについては疑問を示した。

事例⑥ 50代女性、出身は済州島以外だが3か月前に済州島に移住、再訪問、元教師

質問者：(平和公園・記念館を)訪問してみているかがですか。

回答者：入ってみて、展示館導入部には済州の歴史よりかは韓国の全体的な歴史があって、韓国の歴史と関連しながら、このようなことが済州で起きたということを理解しやすかったと思います。そしてその後半に墓地とつながる部分を見ると苦しくなりました。思ったよりかは良く出来ていて、妹がまた高校の先生です。なんとなく家柄的に全部教員になっていますが、学生たちはここをあまり訪れないと聞きました。まだ、その、なんというべきか、政権が変わる度、まだ現代史がすべて整理できていない部分があってそうになっているかもしれませんが、私たちが春に来て見学した時に、高校生たちが見学に来ていて、案内される方々が……私たちが理解するものと、子供たちが受け止めることって、違うじゃないですか。そんなに熱心に話されていましたが、子供たちからすると、それが被害者の話として、一つの声として……そのような部分は少し経つと、…(中略)…そのような部分が子供たちには役に立つのではないかと思うんです。 ※下線：筆者

彼女は平和公園・記念館に再訪問しているが、春に来ていた時の高校生の様子を見て、彼女の言葉を借りると、「被害者の話」「一つの声」としてしか、済州4・3事件を理解できないのではないかと危惧していた。つまり、全体的により深く済州4・3事件を理解するには、限られた時間を使って平和公園・記念館を見学することや、案内(説明)を受けるだけでは、特に若年層にとっても理解が不十分なまま、日常に戻る可能性があると考えていると思われる。一方で、時間の経過とともに、そのような不十分な理解は解消できるのではないかという見方も同時に示している。

彼女は、平和公園・記念館の価値そのもの、見学自体に否定的な見方を示しているわけではなく、済州島が修学旅行に平和公園を入れるように注力してもらいたいという意見に加え、修学旅行を企画する教員の教育の必要性についても語っている。さらに彼女は、自分が中高生の時には(済州4・3事件について学んだ時には)全て‘パルゲンイ’(共産主義者)と教わったが、実際調べてみるとそうではないことに気づいたと語る一方、実際同じ年配(中高年層)には未だにそのように(客観的に)認識することが容易ではないとも語っている。

上記のインタビュー内容は、これまで記述してきたその他のインタビュー内容と合わせて分析することで、済州4・3事件にまつわるダークツーリズムの現状、韓国籍訪問者の観光経験が深く考察できる。例えば、彼女は、矛盾するかのようにも見えることをインタビューで語っている。具体的には、済州4・3事件が「被害者の話」「一つの声」としてしか理解

できないかもしれない若年層の理解に関する懸念と彼女が受けてきた教育課程における済州4・3事件の偏った見方である共産主義者による暴動と実像の違いという二つのことを指す。

前者については、結果としての被害、被害者の声のみに焦点を当てることは、済州4・3事件にまつわる朝鮮半島における歴史、現代史の理解に（意図せず）妨げになる可能性があるという見方かもしれない。特別法の定義づけにも、加害という側面が抜けていることに対する批判があったが、済州4・3事件は当然、被害者の声に注目すること自体は問題ないが、それだけでは見えてこない部分があることは確かである。しかし、インタビュー調査に応じた10代の回答者2名からも、済州4・3事件については中学校の教科書で学んだことを覚えていると答えながら、見学の感想については「良い事件ではなかった」「人権を守るべき」という身近な返答しか得られなかった。もちろん、家族旅行中の突発的なインタビュー依頼だったこともあるので、調査者と回答者の関係性もなく、回答に十分に時間を割いてくれなかったこともあるかと思うが、彼らの理解が果たして十分だったかについては疑問が残ったことも確かである。実際、記念館の出口周辺に設置されていた見学後の感想カードの内容を見ても、未成年と思われるカードの中身は、被害者への追悼や今後同じ悲劇がないことを願う内容が大半を占めており、数は少なかったが、軍や警察に対する批判のコメントも見受けられた。

後者については、済州4・3を共産主義者による叛乱と学んだことと実像の違いについて、中高年層においては未だに客観的にもしくは中立的に済州4・3を捉えることを難しいという見解だった。実際インタビュー調査においては、平和公園・記念館の見学後の感想、見学前後の認識変化に関しては、年代による差異はあまり見られなかったが、南北分断と済州4・3事件の関係に関する質問に対しては、若年層、とりわけ20代の回答者と、主に50代以上の中高年層の回答は違いが見られた。

20代の回答者は「史実」としての二つの関係性を理解してその内容を自分の言葉で語っていたのに対し、中高年層回答者からは両者の関係性がないという回答が複数見られた。そのなかには、質問に対する違和感を示したケースや、イデオロギー的対立に基づく分断、もしくはイデオロギー的対立による犠牲に強い拒否感を示した回答者もいた。それらの中高年層の回答は、済州4・3事件について理解が足りないための、そのような反応を示したという解釈よりかは、彼らがそれまでに経験してきた出来事を踏まえた上で、分断と済州4・3事件の関係性についてより慎重に回答しようとするとも見える。

他方では、済州4・3事件がそれまで共産主義者による暴動として教育課程で提示され、それを学んできた世代からすると、軍事政権、それ以降を含めて韓国現代史におけるイデオロギー的対立の政治利用も含めて、簡単にその関係性を語るができないという判断が働いたかもしれない。他の解釈としては、「済州4・3事件」を「共産主義者による暴動」として捉えられてきたものを、ようやく特別法の制定や平和公園の開園でその捉え方が変わっているなか、南北分断と済州4・3事件の関係性を聞かれて、違和感を覚えたかもしれ

ない。つまり、済州4・3事件を分断のように共産主義と自由主義との対立構図で捉えていないという見解を示すために「関係性がない」と両者の関係性を否定したかもしれない。

改めて彼女のインタビュー内容を見ると、済州4・3事件が「被害者の話」「一つの声」としてしか理解できないかもしれない若年層の理解に関する懸念と彼女が受けてきた教育課程における済州4・3事件の偏った見方である共産主義者による暴動と実像の違い、そして中高年層には客観的・中立的に同事件に向き合うことが困難であるという声だった。つまり、イデオロギー的対立およびその政治的利用を長年経験してきた中高年層にとってイデオロギーの問題に自由になれることが難しく、だからこそ若年層にそれを期待したいが、それも被害の側面からだけ見ようとすると全体像・現代史そのものが見えてこないという矛盾ともいえる意見だった。次のような30代の回答者のインタビュー内容を取り上げてから再度考察を行いたい。

#### 事例② 30代男性、済州島以外、初訪問、大学教員

質問者：南北分断についてどのように考えていますか。そして（平和公園・記念館）訪問後、どのように思いますか。

回答者：南北分断というは、一種の悲劇です。持っている人々が、力のある人々が、本人たちの私利私欲を満たすためにもたらされたと思います。同調者といなかったわけではないけれど、ともかく分断はあまりにも大きな悲劇で、ここを訪問してから感じたことは、ここから北韓（北朝鮮）に行った、そして4・3事件を誘発した本人が自ら北に渡り序列30位内に入るそれ自体があまりにも今と似ていると強く思いました。未だにそのような勢力がいて、え、ここでも改めて感じました。

済州4・3事件真相調査報告書の結論にも、済州4・3事件の武装隊のリーダー役だった金達三が北朝鮮で開かれた大会に参加するために北朝鮮に渡ってから戻ることにはなかったことが記されているが、その詳細について把握していたから上記のような発言があったと思われる。済州4・3をどのように捉えるかという根本的な認識の問題に立ち戻ることになるが、少なくとも報告書の内容とそれに基づく展示においては、次のようなことは言えるかもしれない。つまり、済州4・3事件について理解を深める際には、「イデオロギー的対立と政治的利用から離れて中立的に捉えるべき」だが、その過程において、結果としての被害のみならず、韓国現代史に向き合う必要性があり、そのためには「イデオロギー的対立抜きには理解できない」という韓国特有の政治社会的事情が浮かび上がる。さらに次節で、済州4・3事件に向き合う難しさと再帰性を迫る済州4・3事件関連データベースの特徴について考察する。



### 5.3 再帰的考察を迫る済州4・3事件関連ダークツーリズム

済州4・3事件を理解することは、年代問わず、韓国籍ツーリストにとって決して容易ではないといえる。なぜかというと、済州4・3事件を理解しようとすると、韓国現代史におけるイデオロギー的対立・言説に向き合わざるを得ないが、イデオロギー的対立に基づく分断とその継続という世界でも稀有な政治社会的状況下で、韓国国民にとって自由な空間を確保し考察することを妨げているからである。平和公園・記念館に訪れる多くの韓国籍訪問者は、その難しい課題に自ら向き合うことになる。ところが、訪問前からその課題に直面するとは思っていなかったと語るケースもあった。

例えば、4章4節の事例⑨で20代2名の回答からも確認できるように、彼女たちは南北分断と済州4・3事件の関係性について、見学前は理解することなく、見学後、両者の関係性に気づいたことをそのうち1名が語ったが、その一方で、本人にとって大きな反響はなかったとも答えている。同じく4章4節で取り上げた、別の20代兵役中の回答者（事例①）や60代の回答者（事例⑩）からは、済州4・3事件と南北分断の関係性や分断の「連続性」に関する発言が見られた。事例①からは、南北関係改善や葛藤解消を望む声も確認できた。

事例⑨の回答者は済州4・3事件と南北分断の関係性に理解を示しつつも心に響くものはなかったと語るケースにおいては、自らも語っていたが、分断に関する実感があまりないため、必ずしも「連続性」のある分断を捉えていない。遠藤の指摘に基づいて解釈するなら、非日常における苦難（済州4・3事件での被害と分断との関係性）に触れただけではなく、日常における苦難（分断）のこともダークツーリズムを通して再認識することになったはずだが、彼女にとって分断は、必ずしも日常における苦難という実感は得られなかったと解釈できる。それに対して、事例①の20代回答者は兵役中で、朝鮮戦争で亡くなった犠牲者の遺骨を発掘することにも取り組んでいると語っていたので、同世代においても分断に関する捉え方には大きな差が見られたかもしれない。彼は兵役中という状況から考えても、朝鮮戦争や分断、イデオロギー的対立を身近に感じることもあり、非日常における苦難（済州4・3事件での被害と分断との関係性）と、日常における苦難として分断及びその継続を意識的に捉えようとしていると見えた。また、その背景としては、彼が、海外の大学で国際政治・国際関係について学んでいたという経験も大きく影響している可能性がある。

4章で述べたように、イデオロギー的対立に敏感に反応する回答者も多く、南北分断、済州4・3事件と南北分断の関係性については回答が思うように得られなかったことも事実だが（また質問者の意図を誤解してしまったかもしれないが）、済州4・3事件を理解する上で、韓国現代史に振り返ることは必要不可欠である。その再帰的考察には、過ぎ去った「歴史」としての済州4・3事件だけではなく（‘非日常’）、軍事政権下でタブー視された時期、民主化運動による認識変化と政府認識との対立、特別法の制定と報告書の発行、平和公園の開園を含む真相究明を巡る対立（非日常と日常の‘間’ともいべき期間）、そして、いまだに続くイデオロギー的対立・その言説、そして分断という状況等（‘日常’）をすべて

振り返ることになる。また、それは「歴史」という個人とは無関係なものを振り返るというより、現代史のなかを生き抜いてきた世代にとっては、自分の人生そのものと現代史を重ねながら、再帰的に振り返ることになる。

インタビュー調査で唯一、ガイドという仕事をしている30代男性（済州島出身）から回答を得たが、彼は、慎重にお客様の反応を見て、済州4・3事件にまつわる平和公園への案内を決めているということと、その理由としては、韓国において、ダークツーリズムが「馴染みのない」分野だという説明していた。ところが、今やダークツーリズムのカテゴリとして分類されるDMZ（非武装地帯）ツアーや板門店観光等は、ダークツーリズムという用語が提案される前から、反共産主義的教育のために、‘安保観光’としていち早く実施されていたので（轟、2013）、ダークツーリズム（現象としてのダークツーリズム）に馴染みがないというわけではない。むしろ、済州4・3事件にまつわるダークツーリズムが、現在まで続くイデオロギー的対立を含めた韓国現代史に加え、自分の人生の再帰的考察を迫る観光（政治的スタンスも問われるような観光）ということを踏まえると、韓国国民にとって（中々）「馴染めない」ダークツーリズムともいうべきかもしれない。

## 6. おわりに

従来の観光研究、ダークツーリズム研究において、課題として指摘されていた観光行動、観光客の再帰的考察、媒介性等を本稿では済州4・3事件にまつわるダークツーリズムを事例として取り上げ考察を行った。済州4・3事件は、長年タブー視され、教育課程においても偏った叙述内容でしか学ぶことができず、文学作品等を通して「間接的」に接近するしかなかったが、特別法の制定や報告書の発行、平和公園の開園等の真相究明と「直接的」接近が可能になったことで、韓国籍訪問者は平和公園を中心とする済州4・3事件関連ダークツーリズムに参加している。その訪問動機は世代を問わず、真相を知りたい、学びたいというような目的が大半を占めた。

40代以上の中高年層にとっては、教育課程においても十分に学ぶ機会が得られなかったことが訪問動機として理解できる一方、特別法の制定後、教育課程でそれ以前の世代よりは「中立的」な視点から同事件について学ぶ機会が得られている20代以下の若年層にとっても、済州4・3事件について学ぶためには済州4・3平和公園への訪問が必要との認識が確認できた。年代問わず、メディアでの報道にも注目する必要がある。同事件に関するメディアの報道で、社会的関心が高まったことはいうまでもないが、様々なメディアの出現と異なる政治色を持つメディアの報道内容・視点の違いから、自分の目で真相を確かめたいというニーズも高まったと分析できる。

そもそも韓国の現代史は、朝鮮半島におけるイデオロギー的対立と無関係ではなく、現在も南北分断という状況下に置かれている。同時に、韓国国内においても保守と進歩の対

立は激しく、歴史的にイデオロギーの政治利用も多く見られた。異なる政治的スタンスに基づくメディアの報道も決して昨今の話ではない。本研究でインタビュー調査の回答者の声からは、タブー視された歴史に加え、極端に分かれるメディアの論調に関する内容も含まれ、実際、自分の目で確かめるための選択肢としての平和公園への訪問は決して不自然ではないと思われる。それは、Stone が論じたような近代における遠ざかった死と非日常・ダークツーリズムを通じた接近・消費という観光経験とは少し距離を置くようなものと考ええる。むしろ、軍事政権下で長年タブー視され、また未だに対立し混迷する済州4・3事件について、自ら済州4・3平和公園への訪問を通して真相を確かめるというニーズは、抑圧された同事件への真相に迫ろうとする自然な反応かもしれない。ただ彼らの観光経験は、韓国現代史の再帰的考察を迫るものである。

本稿では済州4・3平和公園(記念館)の見学後の済州4・3事件に関する認識変化と、済州4・3事件と南北分断の関係性に関する認識変化について分析した。済州4・3事件に関する認識については基本的には年齢問わず、認識変化を認める声と、被害の詳細に衝撃を覚えたという意見や、同民族として反省や教訓として生かす方法に関する言及が大半を占めた。

一方で、済州4・3事件と南北関係に関する質問には、両者の関係性を初めて知ったという発言やその韓国現代史の連続性のなかに済州4・3事件と分断を位置づける見方が確認できた。南北分断と済州4・3事件の関係について見学を通して初めて理解できたと語った20代の回答者は、非日常における苦難として「済州4・3事件」「南北分断」の関係に理解は示すものの、日常における「南北分断」との連続性についてはあまり意識的ではない反応を示した。他方、同世代ではあるが南北分断を意識せざるを得ない兵役中で朝鮮戦争の戦死者の遺骸発掘にも取り組んでいる回答者は、より意識的に朝鮮半島における分断や済州4・3事件を含め、韓国現代史を一連の連続性を持って理解しようという見解を示した。

中高年層においても「南北分断」と「済州4・3事件」の関係性に対する回答は分かれたが、両者の関係性を否定する回答者も複数名見られた。そのなかには、南北分断に関する質問に対し違和感を示すケースやイデオロギー的対立そのものに対する強い拒否感を示す回答者もいた。個人の政治的スタンスや経験の差異、あるいは質問の意図を政治的に捉えてしまったことも考えられるが、いずれにしても済州4・3事件について理解を深めようとした際に、必ず韓国現代史に向き合うことになるのはいうまでもない。

済州4・3事件に対する理解を深めるためのプロセスとしては、韓国籍訪問者は(軍事政権下で長年タブー視されたため)イデオロギー的対立とその政治利用から一旦離れて(距離を置いて)同事件を「中立的」に理解しようとするが、結果としての「被害」のみならず、全体像を把握しようとする、イデオロギー的対立に翻弄されたともいべき韓国現代史への理解も必要となる。韓国現代史においてイデオロギー的対立は、現在もなお続く「南北分断」とその影響としての済州4・3事件への被害拡大、その後のタブー視された歴史、いまだに続く保守・進歩の政治対立を含めて、連続性のあるものとして再帰的に考察する

ことになる。時系列に整理すると、韓国籍訪問者は、過ぎ去った‘非日常’としての済州4・3事件だけではなく、同事件がタブー視されてきた歴史、4・3に対する認識を巡る対立が続いた（‘非日常’と‘日常’の）‘間’ともいふべき期間、そしてイデオロギ的対立に基づく分断とその継続、いまだに続く左右対立を含めた‘日常’、其々の「苦難」のすべてを再帰的に考察することになる。このような再帰的考察をする際に当然、各個人の経験、政治的スタンスが影響するが、いずれにしても済州4・3事件にまつわるダークツーリズムは「生者」（韓国籍訪問者を含む韓国国民）に‘非日常’（過去）だけではなく、‘日常’（現在）、さらにその‘間’ともいふべき期間も含む再帰的考察を迫るのである。

付記：本稿は、立命館大学人文科学研究所紀要（121号）に掲載された‘Dark tourism of Ongoing Issue: a case study of Jeju April 3rd Incident’（Han and Kang, 2019）を加筆修正したものである。本研究は、JSPS 科学研究費基盤研究C「グローバルなアジア世界の共成を志向するポリフォニック・ツーリズム（多声的観光）」（研究課題：20K12442、研究代表者：遠藤英樹）の成果の一部である。

## 注

- <sup>1</sup> 済州4・3事件にまつわるダークツーリズムが主な済州島への訪問目的ではなく、済州島の観光目的地としての特徴でもある「明るい」観光（リゾート等）との組み合わせとして済州4・3平和公園に訪れた回答者も多かった。済州島の観光スポットを巡るなか、一つの選択肢として、済州4・3平和公園が選ばれたケースも少なくなかった。実際、調査を行った時期は済州島では珍しく積雪が見られたが、そのような天候の影響もあり、急遽コースを変更するなか、平和公園を訪れることになったと語った人や、偶然、済州島の観光中に4・3関連遺跡を見たことで、記念館にも行ってみたいという気持ちになり訪れたと答えた人もいた。さらに、グループ旅行で済州4・3平和公園を訪れた人も見られた。

## 参考文献

- Buda, D. M. (2015) The death drive in tourism studies. *Annals of Tourism Research* 50:39-51  
 遠藤英樹（2016）ダークツーリズム試論—「ダークネス」へのまなざし—、立命館大学人文科学研究所紀要 110:3-22  
 遠藤英樹（2019）他者に寄り添い共生するゲームとしての「ダークツーリズム」—「ダークツーリズム」から「ポリフォニック・ツーリズム」へ—、立命館大学人文科学研究所紀要 121:5-32  
 Han, J.W. and Kang, B, K. (2019) Dark tourism of Ongoing Issue: a case study of Jeju April 3rd Incident, *Memoirs of the Research Institute of the Cultural Sciences of Ritsumeikan University* 121:199-233  
 허상수 (2004) 제주 4·3 사건의 진상과 정부보고서의 성과와 한계, 동향과 전망 (61):176-228 (= Hur, S. S. (2004) Truth of Politicide of April 3<sup>rd</sup>, 1948 in Cheju Island Performances and Limits of Government's Paper on the Incident's. *Journal of Korean Social Trend and Perspective* (61):176-228)  
 市野澤潤平（2016）楽しみのダークネス—災害記念施設の事例から考察するダークツーリズムの魅力と観光経験—、立命館大学人文科学研究所紀要 110:23-60

- 장애옥 · 최병길 (2011) 다크투어리즘 방문객의 동기와 특성 : 제주 4·3 평화공원 방문객을 대상으로, *관광레저연구* 23(1): 65-84 (= Jang, A. O. and Choi, B. K. (2011) Motive and Characteristics of the Visitors on Dark Tourism: Focused on Jeju April 3<sup>rd</sup> Peace Park. *Journal of Tourism and Leisure Research* 23(1): 65-84)
- 강창일 (2003) 뒤틀린 한국현대사와 제주 4·3 사건, *역사와 세계* 27 : 207-216 (= Kang Chang-II 2003 Distortion of Contemporary History of Korea and Jeju 4·3, *History & the World* 27: 207-216)
- Kang, E. J. and Lee, T. (2011) The Dark Tourism Experience: Visitors to the April 3<sup>rd</sup> Peace Park, South Korea. *Journal of Tourism and Leisure Research* 23(7): 547-566
- Kang, E. J., Scott, N., Lee., T. and Ballantyne, R. (2012) Benefits of Visiting a 'Dark Tourism' Site: The Case of the Jeju April 3<sup>rd</sup> Peace Park, Korea. *Tourism Management* 33:257-265
- Light, D. (2017) Progress in Dark Tourism and Thanatourism Research: An Uneasy Relationship with Heritage Tourism. *Tourism Management* 61: 275-301
- 박찬식 (2007) '4·3' 公의 인식 및 서술의 변천, *한국근현대사연구* 41: 170-197(= Park, C. S. (2007) The Public Recognition and Description on Jeju 4·3. *Journal of Korean Modern and Contemporary History* 41: 170-197)
- 박찬식 (2010) 한국전쟁과 제주지역 사회의 변화 : 4·3 사건과 전쟁의 연관성을 중심으로, *지역과 역사* (27) : 81-106 (= Park, C. S. (2010) Korean War and Social Change in Cheju Area: Laying Stress on Relation of the 4·3 Incident and War. *The Journal of Korean History* (27): 81-106)
- Sharpley, R. (2017) 20 Years of Dark Tourism Research: which way now?. *Tourism Studies Review* 5(2):181-184
- Stone, P. R. and Sharpley, R. (2008) Consuming Dark Tourism: A Thanatological Perspective. *Annals of Tourism Research* 35(2):574-595
- Stone, P. R. (2012) Dark Tourism and Significant Other Death: Towards a Model of Morality Mediation. *Annals of Tourism Research* 39(3):1565-1687
- 轟博志 (2013) 韓国におけるタルトンの価値転換と観光資源化—ダークツーリズム「第三の波」一、*立命館大学人文科学研究所紀要* 102: 3-35
- 양조훈 (2014) 제주 4·3 특별법 제정 과정과 4·3 위원회 활동 성과, *여순사건논문집Ⅱ*, (사) 여수지역사회연구소, 528-562 (= Yang, C. H. (2014) Process of the Promulgation of the Special Law for Investigation of Truth about the Jeju 4·3 Incident and Honoring Victims and the Outcome of 4·3 Committee. *Yeosu Suncheon Incident Review* Ⅱ : 528- 562)

